

皆さんこんにちは、今日はおお客様としまして、神戸RCより加藤様、西宮市長 石井登志郎様、ようこそお越し下さいました。石井市長におかれましては、色々大変なところ、お越し下さいましてありがとうございます。のちほど卓話宜しくお願い致します。

そして西宮青年会議所、星理事長様はじめ、松本副理事長様、五味岡副理事長様、井上専務理事長様、ようこそお越し下さいました。4人おそろいで甲子園クラブに入会されますようお待ちしております。

西宮商工会議所青年部会長、辻村様、ようこそお越し下さいました。昨年の意見交換会、御参加ありがとうございました。

「人生100年時代。」学校を卒業して、1つの会社を勤め上げ、年金で残りの生活を楽しむ。そんな生き方は大きく変わる。

経済産業省によると、日本人の女性は93歳、男性は87歳で亡くなる人が最も多い。定年が65歳としても、余生は20年以上ある。20年は人生を再び充実させるチャンスだ。

だが健康やお金への不安も尽きない。

内閣府が60歳以上の就業者に聞いたところ、70歳以降まで働きたいとの答えは8割に上った。多くの方は100年を生きることは、働く場所を見つけることと考える。

日本の100歳以上の人口は約7万人。2050年には50万人を超えるそうだ。長くなる人生に向き合う準備が始まっている。

「70歳の新人」。日本で当たり前になるかもしれない。政府は社会保障制度を高齢者中心から「全世代型」へと変えていくことに取り組んでいる。

3年がかりの改革で手始めに掲げたのが、生涯現役社会の実現。70歳まで働ける環境を整える。出来るだけ制度の支え手を増やし、生涯にわたってみんなで支え合う仕組みをつくるという。

今のように65歳以上を高齢者と呼んでいるのは、1950年半ばに国連が出した報告書がきっかけ。

半世紀以上前のことだ。65歳という年齢で区切った「支える・支えられる」の関係の転換を迫られている。

「人生100年時代」を提唱したベストセラー「ライフシフト」の著者、リンダ・グラットンが先月、企業向けセミナーで語りかけた。

『私は80歳まで働きたい。長寿社会の日本で、高齢者がどう活躍するか。世界中が注目している』

高齢化率で世界トップを走る日本。年齢に関係なく活躍するシニアが増えていく。

うまくいけば「日本モデル」を発信できるかもしれない。

※ 「九十歳何がめでたい」の作者佐藤愛子さんが、人間は「のんびりしよう」なんて考えてはダメだということが、九十歳を過ぎてよくわかりました。と述べています。



山越智寿子さんは72歳の現役ベビーシッターだ